

## 2015年度入学試験(2014年8月実施) 問題1

### 問1

(a) 部分積分の問題としてよく出題されるものである。ただし、部分積分せずとも解ける。

まずは、部分積分で解く。

$$\begin{aligned}
 \int e^{ax} \cos bx \, dx &= \int \left[ \frac{d}{dx} \left( \frac{1}{a} e^{ax} \cos bx \right) + \frac{b}{a} e^{ax} \sin bx \right] dx \\
 &= \frac{1}{a} e^{ax} \cos bx + \int \frac{b}{a} e^{ax} \sin bx \, dx + C \\
 &= \frac{1}{a} e^{ax} \cos bx + \int \left[ \frac{d}{dx} \left( \frac{b}{a^2} e^{ax} \sin bx \right) - \frac{b^2}{a^2} e^{ax} \cos bx \right] dx + C' \\
 &= \frac{1}{a} e^{ax} \cos bx + \frac{b}{a^2} e^{ax} \sin bx - \frac{b^2}{a^2} \int e^{ax} \cos bx \, dx + C'
 \end{aligned}$$

より、

$$\int e^{ax} \cos bx \, dx = \frac{1}{a^2 + b^2} e^{ax} [a \cos bx + b \sin bx] + C''$$

ここで、 $C, C', C''$  は積分定数。

別解：

$\cos x = \frac{1}{2}(e^{ix} + e^{-ix})$  を用いれば、

$$\begin{aligned}
 \int e^{ax} \cos bx \, dx &= \int \frac{1}{2} [e^{(a+ib)x} + e^{(a-ib)x}] \, dx \\
 &= \frac{1}{2} \left[ \frac{1}{a+ib} e^{(a+ib)x} + \frac{1}{a-ib} e^{(a-ib)x} \right] + C
 \end{aligned}$$

となる。これでも答ではあるが、この形だとよくわからないので、分母を実数化して変形する。そうすると

$$\begin{aligned}
 &= \frac{1}{2} \left[ \frac{a-ib}{a^2+b^2} e^{(a+ib)x} + \frac{a+ib}{a^2+b^2} e^{(a-ib)x} \right] + C \\
 &= \frac{1}{a^2+b^2} e^{ax} \left[ \frac{a}{2} (e^{ibx} + e^{-ibx}) + \frac{b}{2i} (e^{ibx} - e^{-ibx}) \right] + C \\
 &= \frac{1}{a^2+b^2} e^{ax} [a \cos bx + b \sin bx] + C
 \end{aligned}$$

となる。

(b) この形は変数変換して積分するのが普通である。ルートを含む積分は、その部分を他の変数に置き換えると解ける場合が多い。ここでは、 $t = \sqrt{1+x}$  と置いてみる。すると、 $x = t^2 - 1$  であり、 $dx = 2tdt$  となる。これらを用いると

$$\begin{aligned}
 \int x\sqrt{1+x} \, dx &= \int 2(t^2-1)t^2 dt \\
 &= \frac{2}{5}t^5 - \frac{2}{3}t^3 + C \\
 &= \frac{2}{5}(1+x)^{5/2} - \frac{2}{3}(1+x)^{3/2} + C \tag{1}
 \end{aligned}$$

となる。

別解：

$t = \sqrt{1+x}$  と置くなんて思いつかないと言う人も居るかもしれない。しかし、そんな人も心配は要らない。 $\int (1+x)^{1/2} dx = \frac{2}{3}(1+x)^{3/2} + C$  という積分が出来る人なら、部分積分で解けることに気がつく。すなわち

$$\begin{aligned}\int x\sqrt{1+x} dx &= \int \left[ \frac{d}{dx} \left( \frac{2}{3}x(1+x)^{3/2} \right) - \frac{2}{3}(1+x)^{3/2} \right] dx \\ &= \frac{2}{3}x(1+x)^{3/2} - \frac{4}{15}(1+x)^{5/2} + C\end{aligned}$$

となる。これは (1) とはえらく違って見えるが、引き算をすると同じであることはすぐに分かる。このように、 $\int x^n F(x) dx$  で  $F(x)$  を  $n+1$  回積分が出来るときには同じ手が常に使える (ここで  $n$  は正の整数)。

なお、不定積分の問題が出たときは、答を微分して被積分関数になるか、必ずチェックすることをお勧めする。

## 問 2

- (a) 微分方程式である。微分方程式というのは、ある関数の階数の異なる微分が互いに打ち消し合っ  
てゼロになるので、微分の階数が違っても複数の項が同じ  $x$  依存性を持つことになる。微分し  
ても形が変わらない関数が指数関数である。したがって、定係数の微分方程式は指数関数型の  
解  $y = Ae^{\lambda x}$  を持つ。これを代入すると

$$\lambda^2 - \lambda - 2 = 0$$

であれば、 $y = Ae^{\lambda x}$  が解であることが分かる。この式を満足する  $\lambda$  は  $2, -1$  なので、

$$y = Ae^{2x} + Be^{-x}$$

が一般解。ここで、 $A, B$  は任意の定数である。

- (b) いろいろな解き方があるが、もっとも知識が要らない方法は、この式の両辺を 3 回微分するこ  
とである。3 回微分すると、右辺はゼロになり、(a) と同じ式になる。すなわち、

$$\frac{d^2}{dx^2} \left( \frac{d^3 y}{dx^3} \right) - \frac{d}{dx} \left( \frac{d^3 y}{dx^3} \right) - 2 \left( \frac{d^3 y}{dx^3} \right) = 0,$$

したがって、

$$\frac{d^3 y}{dx^3} = Ae^{2x} + Be^{-x}.$$

これを積分する。

$$\begin{aligned}\frac{d^2 y}{dx^2} &= \frac{1}{2}Ae^{2x} - Be^{-x} + C, \\ \frac{dy}{dx} &= \frac{1}{4}Ae^{2x} + Be^{-x} + Cx + D, \\ y &= \frac{1}{8}Ae^{2x} - Be^{-x} + \frac{1}{2}Cx^2 + Dx + E.\end{aligned}\tag{2}$$

ここで、 $C, D, E$  は積分定数。さて、これらを (b) 式に代入する。

$$\frac{1}{2}Ae^{2x} - Be^{-x} + C - \left(\frac{1}{4}Ae^{2x} + Be^{-x} + Cx + D\right) - 2\left(\frac{1}{8}Ae^{2x} - Be^{-x} + \frac{1}{2}Cx^2 + Dx + E\right) = 4x^2.$$

これを整理すると

$$C - Cx - D - Cx^2 - 2Dx - 2E = 4x^2.$$

これが、 $x$  によらず成り立つためには、

$$C = -4, D = 2, E = -3$$

となる。すなわち、

$$y = Ae^{2x} - Be^{-x} - 2x^2 + 2x - 3$$

と書ける。なお、ここで、 $A, B$  は任意なので、(2) の  $\frac{1}{8}A$  を  $A$  に書き換えた。

問3 ベクトル演算は、 $(x, y, z)$  座標上での基本ベクトル (座標軸方向を向く単位ベクトル)  $i, j, k$  間の演算規則がわかっていれば解ける。

$$\mathbf{r} = x\mathbf{i} + y\mathbf{j} + z\mathbf{k}, \quad \nabla = \mathbf{i}\frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{j}\frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{k}\frac{\partial}{\partial z}$$

である。

(a)

$$\mathbf{k} \times \mathbf{r} = \mathbf{k} \times x\mathbf{i} + \mathbf{k} \times y\mathbf{j} + \mathbf{k} \times z\mathbf{k} = -y\mathbf{i} + x\mathbf{j},$$

$$\begin{aligned} \nabla \cdot (\mathbf{k} \times \mathbf{r}) &= \left( \mathbf{i}\frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{j}\frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{k}\frac{\partial}{\partial z} \right) \cdot (-y\mathbf{i} + x\mathbf{j}) \\ &= -\frac{\partial y}{\partial x} \mathbf{i} \cdot \mathbf{i} + \frac{\partial x}{\partial x} \mathbf{i} \cdot \mathbf{j} - \frac{\partial y}{\partial y} \mathbf{j} \cdot \mathbf{i} + \frac{\partial x}{\partial y} \mathbf{j} \cdot \mathbf{j} - \frac{\partial y}{\partial z} \mathbf{k} \cdot \mathbf{i} + \frac{\partial x}{\partial z} \mathbf{k} \cdot \mathbf{j} \\ &= 0 \end{aligned}$$

(b)

$$\begin{aligned} \nabla \times (\mathbf{k} \times \mathbf{r}) &= \left( \mathbf{i}\frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{j}\frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{k}\frac{\partial}{\partial z} \right) \times (-y\mathbf{i} + x\mathbf{j}) \\ &= -\frac{\partial y}{\partial x} \mathbf{i} \times \mathbf{i} + \frac{\partial x}{\partial x} \mathbf{i} \times \mathbf{j} - \frac{\partial y}{\partial y} \mathbf{j} \times \mathbf{i} + \frac{\partial x}{\partial y} \mathbf{j} \times \mathbf{j} - \frac{\partial y}{\partial z} \mathbf{k} \times \mathbf{i} + \frac{\partial x}{\partial z} \mathbf{k} \times \mathbf{j} \\ &= \frac{\partial x}{\partial x} \mathbf{i} \times \mathbf{j} - \frac{\partial y}{\partial y} \mathbf{j} \times \mathbf{i} = 2\mathbf{k} \end{aligned}$$

(c)

$$\begin{aligned} \nabla \times (\phi\mathbf{k}) &= \frac{\partial \phi}{\partial x} \mathbf{i} \times \mathbf{k} + \frac{\partial \phi}{\partial y} \mathbf{j} \times \mathbf{k} \\ &= -\frac{\partial \phi}{\partial x} \mathbf{j} + \frac{\partial \phi}{\partial y} \mathbf{i} \\ &= (x\mathbf{j} - y\mathbf{i})e^{-\frac{x^2+y^2}{2}} \end{aligned}$$

$k \times A$  という演算はベクトル  $A$  を  $z$  軸の周りで反時計回りに 90 度回転させる操作である。それ故、ベクトル  $k \times r$  を  $x-y$  面上で矢印を用いてプロットすると反時計回りの渦になる。ベクトルの渦巻きで、ぐるぐる回っているだけなので、増えも減りもしない。それ故、発散 ( $\nabla \cdot (k \times r)$ ) はゼロ。他方、 $\nabla \times$  はベクトル場の回転の強さと向きを表す演算である。 $k \times r$  は  $z$  軸の周りで反時計回り (正の回転) に一様に回転しているので、 $\nabla \times (k \times r)$  は  $z$  軸方向を向く定ベクトルとなる。

#### 問 4

(a)  $|z-1| = |x-1+iy| = \sqrt{(x-1)^2 + y^2}$  である。したがって、 $|z-1| = 1$  は  $(x, y) = (1, 0)$  を中心とする半径 1 の円である。答えはその円の縁と内側という事。

(b)

$$|z^{-1}| = \left| \frac{1}{x+iy} \right| = \left| \frac{x-iy}{x^2+y^2} \right| = \frac{\sqrt{x^2+y^2}}{x^2+y^2} = \frac{1}{|z|}.$$

よって  $|z| \geq 1$ .  $|z| = 1$  は原点を中心とする半径 1 の円である。したがって、その円の縁と外側という事になる。